Nara Women's University

【内容の要旨及び審査の結果の要旨】コールリッジと「他者」-詩に描かれた家族-

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2010-01-06 キーワード (Ja): クブラ・カン, クリスタベル, コールリッジ, サミュエル・テイラー・コールリッジ, 他者, 老水夫の唄 キーワード (En): Christabel, Kubla Khan, Samuel Taylor Coleridge, The Rime of the Ancient Mariner 作成者: 藤井,佳子, 宮川,清司, 横山,茂雄, 竹本,憲昭, 渡辺,和行 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10935/1198

氏名（本籍）	藤井佳子　（大阪府）
学位の種類	博士（文学）
学位記番号	博論第120号
学位授与年月日	平成16年5月20日
学位授与の要件	学位規則第4条第2項該当 人間文化研究科
論文題目	コールリッジと「他者」 －詩に描かれた家族－
論文審査委員	（委員長）教授　宮川清司　教授　横山茂雄 助教授　竹本憲昭　教授　渡辺和行

論文内容の要旨

本学位申請論文はイギリス・ロマン派の詩人、サミュエル・テイラー・コールリッジ（Samuel Taylor Coleridge, 1772-1834）が創作した詩の研究であり、特に1797年から98年に書かれた「コールリッジの三大詩」とされる「老水夫の唄」（'The Rime of the Ancient Mariner'）、「クリスタベル」（'Christabel'）、「クブラ・カン」（'Kubla Khan'）を中心に、これらを「他者」をキー・ワードに考察を試みたものである。

本論文序論では、文芸批評に「他者」という言葉が登場し、定着する歴史を辿るのみならず、「他者」の理論を構築したラカンや「他者」の概念を批評に導入したボーヴォワールの論がヘーゲルに由来することを示し、ドイツ観念論哲学に傾倒したコールリッジの思想基盤と通底しているとした。コールリッジはすでに18世紀末に先取りしていた「他者」の今日的概念に、具体的な形象を与えて詩に描いたのである。本論文は、あるものの「他者」を指摘し、それを論考することは、その「他者」が関与して形成された「主体」の本質をあらためて捉えることであるという理念に貫かれている。

第1章「「クリスタベル」と恐ろしい母－他者の正体－」は、「クリスタベル」解釈の核心ともいえる謎の女性ジェラルダインの正体を考察した。父リオラインと暮らすクリスタベルはある夜出会ったジェラルダインを「客」として連れ帰るが、本章は「客」とは元来その場の「他者」であり、ジェラルダインは「クリスタベル」という作品において、構造的に「他者」であるとまず指摘する。そしてジェラルダインについて、膨大な先行研究を辿ることによって、ラミアやエキドナの系譜であるとし、その後ジェラルダインはユングがグレート・マザーとしたものの具体的な形象ではないかとした。さ

らにグレート・マザーという概念の基である大地母神とジェラルダインを関連づけ、ジェラルダインと日本昔話のキャラクターである山姥との相似性をも指摘した。

ジェラルダインの正体について外的要因から考察した第1章に対し、第2章「夢見る者と夢見られるもの－内なる他者－」では、ジェラルダインという未曾有のキャラクターの生成をコールリッジの内的要因から考えようとした。ジェラルダインは、夜毎コールリッジの夢に現れたコールリッジの「夢の女」と酷似している。先行研究の多くがクリスタベルとコールリッジの自我を、ジェラルダインとコールリッジの無意識を照応させて事足れりとしたが、本章では、二者関係からさらにすすめて三者の関係について考察し、「クリスタベル」という作品は、クリスタベル、ジェラルダイン、リオラインの三者によってコールリッジを表すのではないかと結論づけた。同時に三者の名前の綴りがCOLERIDGEというアナグラムを形成しているとし、「クリスタベル」が、恋人Saraの名前を組み替えてうたったいわゆるAsra詩などアナグラムを好んだコールリッジの、文学におけるアナグラムの第1号である可能性を提示した。

第3章「シンデレラ、パーシー、そして「クリスタベル」－父と娘に介在する他者－」では、ジェラルダインの母性的側面や、「クリスタベル」の伝承物語的要素を手がかりに、「クリスタベル」をシンデレラ物語の構造で分析した。「クリスタベル」にシンデレラ物語の要素が確かにあることがわかり、ジェラルダインの継母的側面が明らかになったが、昔話の通例では、実の母に対する否定的な感情は、継母や魔女などに仮託されて表されることが多く、分析すればジェラルダインも継母ではなく、実の母を表すものとして考えられた。コールリッジは淫らで攻撃的な女性を恐れ、そのイメージを母として分析され得るものとして形象化し、母なるものを根本的な「他者」として描いたというのが本論文第1章から第3章の結論である。

第4章「父の語り－自己と他者の狭間にある我が子－」では、「深夜の霜」(‘Frost at Midnight’)、「ナイチンゲール」(‘The Nightingale：A Conversation Poem, April, 1798’)、「クリスタベル」第2部結びに見られる、父が我が子へのあふれる愛を語った「父の語り」部分について考察し、先の二作品では、「私」にとって我が子は「他者」でありながら自己に非常に近い、自己と「他者」の境界の曖昧なものとして存在しているが、「クリスタベル」第2部結びでは、我が子との心理的距離が発生していることを見た。そしてコールリッジの愛は、不在の者を対象とするのではないかと指摘した。

第5章「妻の不在－家庭の中の他者－」では、コールリッジの結婚観、家庭観について考察した。家庭愛をうたったとされる会話体詩には不可解な点も多く、それは家庭の幸福を主題の一つとするそれらに、子どもの向こうにいつも見えるはずの妻の姿が見えないことだと指摘する。幻想詩においても、妻という存在への、あるいは結婚に対する否定的見解、少なくとも懐疑が見られた。コールリッジは結婚への懐疑を妻に収斂し、家庭の中に違和感ある「他者」として存在する妻を意識的に排除し

たのだというのが本章の結論である。

第6章「「老水夫の唄」論－他者との距離感－」では、水夫の「他者」に対する基本的態度と水夫の家族の描かれ方について考察し、「他者」との関係、「他者」との距離感がこの作品の鍵となっているとした。この作品では兄弟関係は意味ありげに示唆されているが、家族の痕跡はほぼ消され、母については存在すら抹殺されている。この作品における海は「母」を象徴しているが、海は魔性のものが跋扈する場として嫌悪感をもって描かれているとし、「老水夫の唄」には作品そのものに家族の否定があると述べた。

第7章「「クブラ・カン」における語りの構造－自己意識の他者化－」では、「クブラ・カン」にみられる自己意識の他者化について論考した。「クブラ・カン」を「ポーロックからの客」という日常的「他者」によって、創造の偉大なる瞬間を妨げられた詩とし、主体に対する「他者」を描くことに重点を置いたというよりは、自己の意識が自己から離れて外化する現象、すなわち自己意識の他者化を描くことに創作の主眼が置かれているとした。この詩自体はヴィジョンと「私」の関係を、視点の移動によって捉えた三層構造になっているが、作品全体として見ればヴィジョンと「私」の関係を通時的視点から見ている序文を含めた四層構造になっているという見方を提示した。

以上の各論を踏まえた本論文全体の結論では、コールリッジの作品に描かれた「他者」について、三つに分類して総括した。第1のグループはコールリッジによって作品の主体に対する「他者」と認識された上で、ある距離感をもって描かれたものである。ジェラルダインや「老水夫の唄」における「他者」など作品中の「他者」の多くがこの系列に属する。第2のグループは、コールリッジは「他者」と認識しないで作品に描いたが、分析すれば作品中の主体に対する「他者」であるといえるもの、いわば作品世界が無意識的に孕んだ「他者」である。我が子がこれに該当し、「私」にとって我が子は自己と「他者」の狭間にあると分析する。コールリッジの詩に描かれた我が子への「私」の想いには、あふれる愛を注ぐ対象として見るばかりではなく、深く愛すると同時に違和感ある「他者」として斥け、拒む一面が含まれていたと指摘する。第3のグループは、コールリッジによって「他者」と見なされ、コールリッジが意識的にその存在を作品世界から排除した「他者」である。これには妻と母が挙げられる。コールリッジの詩において妻と母は、意識して存在させない「他者」であるといえるのではないかとする。

本論文はコールリッジが詩に描いた「他者」を分析し考察することによって、家庭愛を希求したという定説とは異なる、結婚と家庭の重要性を説きながら妻と母を斥け、我が子を愛しつつ拒むコールリッジの家族観を捉えた。コールリッジの詩という主体が無意識的に孕む異質なもの、詩に現れた「他者」、それが家族であったというのが本論文の結論である。

論文審査の結果の要旨

本論文はイギリス・ロマン派の詩人コールリッジ（Samuel Taylor Coleridge, 1772-1834）の詩についての研究であり、特に彼の「三大幻想詩」とされる「老水夫の唄」（“The Rime of the Ancient Mariner”）、「クリスタベル」（“Christabel”）、「クブラ・カン」（“Kubla Khan”）を中心に、「他者」をキー・ワードにして分析と考察を試みたものである。

序論では、ヘーゲルなどドイツ観念論哲学の影響を大きく受けていたコールリッジは、ボーヴォワールやラカンによって20世紀に構築されることになる「主体／他者」に関する理論を18世紀末において既に先取りしていたと思われるのみならず、彼の詩作品は「他者」という今日的概念に具体的な形象を与えて唄ったものである、とする基本的な考えが述べられる。他のロマン派詩人たちと決定的に異なるコールリッジの特色をこのように的確に捉えた上で、特にコールリッジとその家族の関係に着目しつつ、彼の作品においては家族こそが「他者」という概念と複雑に絡むものである、として本論の分析対象を明確に示している。近年のロマン派研究においては、「他者」という言葉と概念によって指し示されるものは実に多様であり、「研究者たちはこれまで見い出されなかった様々な他者を発掘しつつある」とさえ言われる現状であるが、以下の各章が示すように、詩人にとって最も身近な「家族」に密着してこれを「他者」として徹底的に分析した例は全く見当たらず、ある意味で従来の研究の盲点を衝くものとして、そこに本論のオリジナリティを認めることができるだろう。本論文の意図は、「他者」を指摘し、それを論考することにより、その「他者」が関与して形成された「主体」の本質を改めて捉えようとするところにあると述べられるが、これは18世紀末の詩人の詩の分析に現代批評の概念を用いる理由として明快であると評価できる。

第１章「「クリスタベル」と恐ろしい母－他者の正体－」は、コールリッジが創作した英文学史上でも希有の、謎めいた魔性の女性ジェラルダインの正体に果敢に迫る。中世の城の主である父リオラインとその娘クリスタベルを訪問するジェラルダインの「他者」性が膨大な先行研究とテクストの緻密な分析により、ユングがグレート・マザーとしたものや大地母神、さらには日本昔話の山姥などとの関連性が示される。ジェラルダインの持つ「母性」については従来断片的な言及しかなかったが、本章はこれを見事に体系的に整理してみせるのみならず、山姥との相似性の指摘にみるように、議論の徹底と発想の斬新さは十分評価できる。

第２章「夢見る者と夢見られるもの－内なる他者－」では、ジェラルダインはコールリッジ自身が記録した「夢の女」と酷似しており、彼の無意識において結ばれた女性像、内なる他者の作品化の例であるとされる。本章では更にジェラルダインをクリスタベルのみならず父リオラインを加えた三者

の関係から捉え直し、この作品では三者が一つになって詩人コールリッジを表すのではないかという仮説を、詳しいテクスト分析と共に、三者の綴りがCOLERIDGEというアナグラムを形成するという大胆な推論とによって提示している。申請者の独創性を示す極めてオリジナルな指摘であり、その斬新さの故に疑いも残るが、逆にこれを斥ける根拠も見当たらない。

第3章「シンデレラ、パーシー、そして「クリスタベル」－父と娘に介在する他者－」では、この作品をシンデレラ物語の構造で読む先行研究を検討しつつ、そこに浮かび上がるジェラルダインの継母的存在感と、それが指し示すジェラルダインの母性について、他の論考に引きずられることなく、テクストの確かな読みに基づいて、独自の骨太な論を展開している。昔話の通例では、実の母に対する否定的な感情は、継母や魔女などに仮託されて表されることが多く、分析すればジェラルダインも継母ではなく、実の母を表すものと考えられる。コールリッジは、淫らで攻撃的な女性を恐れ、そのイメージを母として形象化し、母なるものを根本的な「他者」として描いたという。この指摘は、本論中で論じられる家族の要素の中での「母」の特殊性を浮かび上がらせるものとして洞察に富む。

第4章「父の語り－自己と他者の狭間にある我が子－」では、「深夜の霜」(“Frost at Midnight”)、「ナイチンゲール」(“The Nightingale”)、及び「クリスタベル」第2部結びに見られる、父が我が子へのあふれる愛を語った「父の語り」部分について他者の概念を用いての考察がなされる。即ち、「私［＝詩人］」と我が子という「他者」との間に発生する心理的距離を詳細に分析した上で、コールリッジの愛は不在のものを対象とする傾向があるのではないか、という。これは、複雑な家庭人でもあった詩人コールリッジの本質を捉え得た指摘である。

第5章「妻の不在－家庭の中の他者－」では、家庭愛・家庭の幸福を主題とする会話体詩（自らの家庭を歌った自伝的な詩）に、子供の向こうにいつも見えるはずの妻の姿が見えない点が不可解である、との指摘がなされる。一方、現実の家庭と無関係の幻想詩においても、妻という存在への、あるいは結婚に対する否定的見解、すくなくとも懐疑がみられる。詩人は結婚への懐疑を妻に収斂しており、家庭の中に違和感ある「他者」として存在する妻を詩の中から意識的に排除したのだ、という。これは申請者が恐らく女性としての視点から発見した独自の鋭い論点であり、高い評価に値する。

第6章「「老水夫の唄」論－他者との距離感－」では、呪われ罪を背負って海を放浪する老水夫の物語に家族の痕跡がほぼ消され、母については存在すら抹消されており、一方仄かに示される兄弟関係には「カインの放浪」とのパラレルが見られる、などの指摘がなされる。また、この作品における海は「母」を象徴しているが、海は魔性のものが跋扈する場であり、嫌悪感をもって描かれているなど、精神分析学者の論に依拠することなしに文学研究者の立場から独自のテクスト分析によって新論を展開している。しかし、この作品そのものに家族と結婚の否定があり、生まれ変わった水夫は神にも依存することなく、神との適切な距離を見い出し、それを実践している、とする結論部はやや作品から逸脱して「作文」に堕した感があり、当初のオリジナルな発想を十分に生かし切れなかった点が

惜しまれる。

第7章「「クブラ・カン」における語りの構造－自己意識の他者化」は、夢にみた詩のヴィジョンを目覚めて紙に書き写している最中に来客があって詩作が中断され、詩は未完に終わる、というエピソードで有名な作品「クブラ・カン」を自己意識の他者化の観点から論じたもの。この詩の語りは、ヴィジョンと「私」の関係を視点の移動によって捉えた三層構造（ヴィジョンと一体化している私、ヴィジョンを対象として認識する私、私から外化してヴィジョンと私の関係を外から見る語り手）になっていると指摘した上で、実は作品全体として見れば、ヴィジョンと「私」の関係を通時的視点から見ている序文（例のポーロックからの来客のエピソードを伝える散文）を含めた四層構造と考えることができる、としてこの詩の構造の秘密を見事に解明して見せている。

本論文はコールリッジが時に描いた「他者」を分析し考察することによって、家庭愛を希求したという定説とは異なる詩人の家族観のねじれを浮き彫りにし、思想と現実の間に横たわる乖離を顕わにして見せた。「他者」を指摘し、それを論考することにより、その「他者」が関与して形成された「主体」の本質を改めて捉える、という当初の意図は概ね達成されていると言える。この方法論によって幾つかの重要な研究成果が生み出された。家族愛の美しい結晶としてイギリスの読者を魅了してきた一連の会話詩の中に妻・母の不在を指摘しその意味を明らかにしたのはその一例であるし、三大幻想詩の中で従来その評価が定まらなかった「クリスタベル」に対して多様な視座からの分析・考察を試み、この作品の未完の意味を他者ジェラルダインのありようから見事に解き明かしてみせたのはその顕著な例である。また英文学の古典的名作として揺るぎなき地位を占める「老水夫の唄」の中に家族の不在と結婚忌避の思想を主張するところなどにも本論の革新性の一端が窺える。一方、斬新な着眼は、時としてやや強引とも思えるテクスト解釈と隣り合わせている例も見られる。しかし、その多くは論文の読者を戸惑わせつつ、ついには新たな読みの模索へと誘う類いのものであり、必ずしも無責任に読みを破綻させていたわけではないことに気づかせられる。「老水夫の唄」の結論に典型的に見られるように、キリスト教についての理解は必ずしも十分とは言えないし、家族や結婚を論じる際に同時代の社会・政治のありようとの関連への言及も必要であろう。これらの課題への取り組みはこれからの研究に期待したい。

本論文は、テクストの緻密な読みと膨大な先行研究の飽くなき調査に基づいた上で、定説に拠らず、独自の論を斬新な着眼点と確かな構想力で構築したものであり、コールリッジの作品解釈に新たな地平を拓く意欲的な研究として高く評価できる。以上の諸点から、本論文は、奈良女子大学博士（文学）の学位論文に値するものであると判断できる。